慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世墓標とその地域的・社会的背景：山城国木津郷梅谷村の事例
Sub Title	Social relationships and local differences : an archaeological analysis of gravestones in the Edo Period
Author	朽木, 量(Kutsuki, Ryo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.1 (1996. 9) ,p.91- 110
JaLC DOI	
Abstract	The focus of this paper concerns the origin of a distinct local difference between gravestones and the influence of the social relationship upon the gravestone buyers' subjective choices. My argument is based on the gravestones which were used during the Edo Period (A.D.1603-1868) at the Umedani, Kaseyama and Kizu village in Kizu Town, and at the Kannonji village in Kamo Town Kyoto Prefecture Japan. My examination of the way in which gravestones with a distinctive arcshaped top were distributed and of the frequency of materials shows that I) Although Umedani village along with Kaseyama and Kizu villages belonged to the same community which was called Kizu-Go (木津郷), there were local differences in the Umedani village gravestones; 2) The frequency of materials in Umedani village had a strong resemblance to that of Kannonji village which belonged to another community called Kamo-Go (加茂郷). These findings show that Umedani village had a distinct local difference in Kizu-Go community and probably indicate that gravestone buyers in Umedani village ordered from the stonemason, not in Kizu-Go community, but in Kamo-Go community. According to the historical documents, there were about three hundred legal battles between Umedani village and the other villages in Kizu-Go community. An old map shows that the main road in the Umedani village led to Kamo-Go directly. This historical evidence suggests that there was social opposition between Umedani village and the other villages in Kizu-Go, and there was a closer relationship between Umedani village and Kamo-Go community than with Kizu-Go community. I argue that such social relationships influenced the gravestone buyer's subjective choices and caused them to order from the stonemason in Kamo-Go community.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960900-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世墓標とその地域的・社会的背景

―山城国木津郷梅谷村の事例―

朽木　量

はじめに

日本の墓制史上、民間において石造の墓標が広く造立されるようになるのは中世末から近世以降のことである。これらの近世墓標に対する考古学的研究は、その形態に注目して型式学的に分類し、墓標型式の由来や変遷を考察した研究が主流であった。その一方で、「近世墓標という資料の裏側にある〝意味〟」（三好一九九〇）に注目し、中でも墓標造立の当事者である施主の「意志」を明らかにしようとする研究が散見されるようになりつつある。例えば三好義三は、墓標形態の変遷について墓標に対する人々の意識の変化すなわち「観念の変化」として捉え、寺請制の浸透と結びつけて論じている（三好一九八六）。また、谷川章雄は「家ごとに見た墓標のあり方を分析する」ことにより、「家を単位とした死者供養の一般化」と戒名の階層性からみた「家格」の定着と家意識を論じた（谷川一九八九）。それらは、個々の墓地において観察された傾向を文献史学の側で既に指摘されている全国的な歴史の動態の中に位置づけた研究として評価されるものの、個別的な地域毎の歴史と関連づけた上で施主の「意志」を捉えようとする視点はあまりみられなかった。

個別的な地域毎の歴史と墓標のあり方を関連づけて論じることの重要性は、米国の墓標研究の潮流の中においても同様に指摘できる。従来から行われていた墓標の図像学的研究に加えて、米国において墓標が考古学的関心の下で研究され始めるのはDeetzとDethlefsenによるセリエーショングラフを用いた研究からである（Deetz

and Dethlefsen 1965)。その後の研究は墓標に記された生没年の銘文を利用した歴史人口学的視点（Dethlefsen and Deetz 1967)、コミュニティーと文化変化を論じた民族誌学的視点（Dethlefsen 1981)、エスニシティーと階層の問題を墓標の価格から論じた社会経済史的視点（Clark 1987）など多方面にわたるが、その多くが特定のモデルを利用して画一的で合理的な解釈を行ったものである。ところで、近年ポスト＝プロセス考古学がプロセス考古学の合理的で論理実証主義的な解釈を批判している。中でもホダーが当時の人々の主観的意味を重要視し、歴史的な脈絡を踏まえて歴史的事実を再構成しようとする「コンテキスト考古学」を主張していることは注目に値する（Hodder 1986)。歴史考古学の一分野である墓標研究も、こうした最近の考古学理論の新しい潮流と無関係ではありえない。その場合、画一的で合理的な解釈だけでなく、個別的で多様な地域毎の歴史的状況に根ざした上で、墓標上に表出した当時の人々にとっての歴史的意味を視野に入れた解釈が墓標研究においても必要となると思われる。

以上のように、個別地域の墓標が持つ諸特徴を直ちに全国一律の画一的解釈のレベルに持ち込んだり、また、特定のモデルによる斉一的理解を急ぐあまり、墓標の持つ地域的・個別的な特徴を捨象してしまう墓標研究とは一線を画した新たな研究手法が必要とされている。本稿ではこうした墓標研究の動向を踏まえて、山城国木津郷梅谷村（現京都府相楽郡木津町大字梅谷）及び近隣の村々の近世墓標を比較・分析する。そこでは、墓標において認められる地域的な差異の歴史的背景として当時の社会的関係を文献史料から復元し、そうした背景が墓標に如何に影響していたかについて考察する。その上で、墓標以外の地域の史料を用いて復元した地域毎の個別の歴史的背景を踏まえて施主の「意志」を具体的に解釈することの重要性を指摘したい。

1　近世の木津郷の自然環境と歴史

本稿で取り上げる山城国木津郷は山城盆地の最南端に位置し、近世の木津郷は現在の京都府相楽郡木津町から相楽地区と吐師地区を除いた木津町の東半分の部分に相当する。木津郷の地形は、北接する木津川の氾濫原である木津河谷低地が北西に広がり、東南部は奈良丘陵の末端となっており（図1)、丘陵部からは井関川が木津郷の中心を通り木津川まで流れている。木津本郷五カ村は

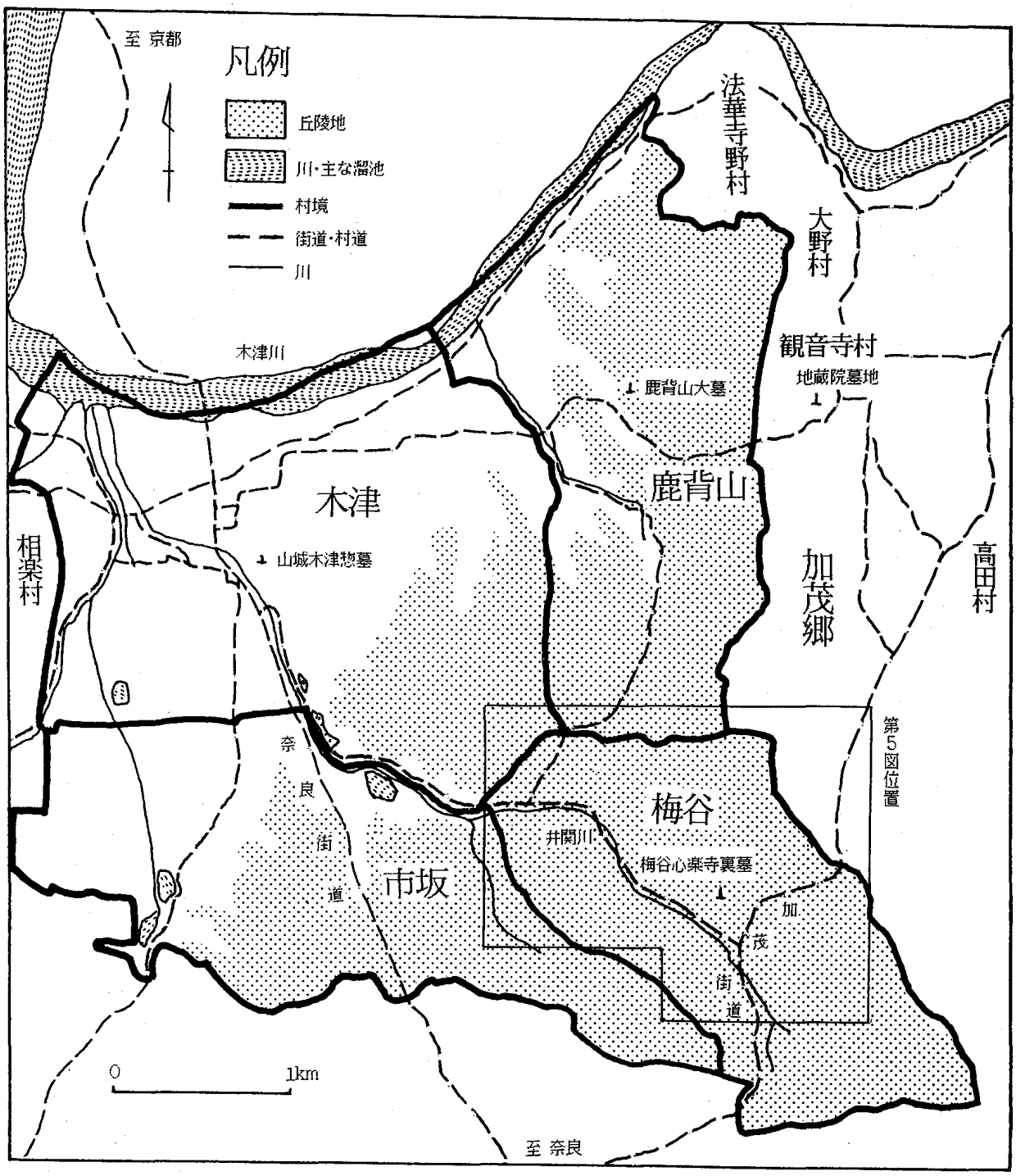

図1　調査した墓地の位置

（注）　ここに図示した現在の木津町の東半分は江戸時代に「木津郷」と総称された。木津郷は本郷と枝郷に大別され、本郷は小寺村・大路村・千童子村・枝村・上津村よりなる。しかし、村相互の結びつきが強く、耕地も入り組んでおり墓地も共同で所有しているため、ここでは「木津」として本郷全体を一括して記載した。一方、枝郷は市坂村・鹿背山村・梅谷村の３ヵ村をさし、各村毎に墓地を所有している。比較のために調査した地蔵院墓地（詣り墓）である。観音寺村は、木津郷に隣接する加茂郷に属している。

表1　木津郷九カ村の関わり

		小寺	大路	千童子	枝本	上津本	市坂	鹿背山	梅谷	南川
惣高		4,401、8176石								
惣家数		1,100余軒								
本郷・枝郷		本	本	本	本	本	枝	枝	枝	
惣山		○	○	○	○	○	○	○	○	○
悪水吐樋	不成柿・上久保樋	○	○	○	○	◎		○		
	大路口樋	○	◎	○	○	○				
	小寺口樋	◎	○	○	○					
	門樋	◎	○	○	○					
	二ツ樋	◎	○	○	○					
溜池支配	文ケ廻池		○	○	○					
	新池		○	○	○					
	大谷池		○	○	○					
	畑池		○	○	○					
	荒内池	○	○	○	○		○			
	御領池	○					○			
	小林池	○								
	銚子池	○	○	○	○	○	○		○	
	大南谷大池・新池					○				
街道	奈良街道	○	○	○	○	○	○	○		
	加茂街道								○	
河川支配	山田川	○	○	○	○	○				
	鹿川	○								
	井関川		○	○	○	○				
	釜ケ谷川					○				
	鹿口川							○		
木津郷流作場支配		○	○	○	○	○				
氏神社	御霊社	○	◎	○	○	○				
	天神宮・八幡宮	○	○	◎	○	○				
	白山社	◎								
	春日・八幡六社						◎			
	八王子・恵美須二社							◎		
	天満宮・八満宮二社								◎	

(注)　◎印は責任村あるいは所在地

『木津町史』本文編1991を一部改変

木津河谷低地に、枝郷の鹿背山村と梅谷村、市坂村は奈良丘陵とその開析谷に位置する。奈良丘陵は鮮新統の砂層或いは中新統の礫層よりなり、干ばつの原因となるばかりでなく、薄脆な土質はしばしば土砂流失を起し、井関川下流での天井川化と河川氾濫の原因ともなった。したがって、乱開発による土砂流失を防ぐため近世初期までは郷民立ち入り禁止の御留山となっていた。しかし、梅谷地区開発の際（延宝3年）に木津本郷と梅谷との間で論争が起き、その後享保八（一七二三）年以降は郷を中心とした共同管理方式に移行した。このことについては4章(2)節で詳述する。

木津郷は木津川水運の浜としてばかりでなく、京都と奈良を結ぶ奈良街道（西京街道）の宿場として古くから繁栄し、東南丘陵部の梅谷地区には加茂街道（伊賀道・信楽道）も通っている。木津郷は行政的には幕府領と公家領が混在していたが大きくは本郷と枝郷に二分され、本郷は近世の村名でいうと小寺・大路・千童子・枝・上津の五カ村と千童子村の支村の南川村からなっていた。枝郷は鹿背山・市坂・梅谷の三カ村を指していた（表1）。但し、梅谷村は4章(2)節で詳述するように延宝七（一六七九）年に開発許可が下り、天和三（一六八三）年に独立して開村した新しい村である。本郷五カ村は氏神社の共有や木津郷流作場の共同支配、五カ村内のみで共通の掟を作成するなど多くの点で密接な繋がりを持っており、耕地も相互に入り組んでいた。村の独立性は薄く、その分だけ郷の存在が強く働いている。一方、枝郷と総称される鹿背山・市坂・梅谷の三カ村は、木津惣山の共同管理と溜池や街道などの管理で部分的に郷との繋がりを持っているだけで、氏神社はそれぞれ村毎に持つなど、村の独立性が本郷に比べると強かった（表1）。

墓地の運営方法も本郷と枝郷では異なっている。本郷五カ村では坪井良平が調査した山城木津惣墓を共同で管理している（坪井一九三九）が、枝郷は各村でそれぞれ共同墓地を持っている。本稿の分析に用いる鹿背山大墓と梅谷心樂寺裏墓地[1]はそうした村毎の共同墓地である。

また、参考のため取り上げる加茂の観音寺村は木津郷と同様の組織である加茂郷に属しており、行政的には観音寺村を含めた加茂郷全体が籐堂藩に属している。墓地は観音寺村全体で地蔵院裏に共同墓地[2]を持っている。また、観音寺村付近の村々には花崗岩の採石場があったとされ、大阪城築城時の残念石や江戸後期の文書が残されている。

2　木津郷にみられる墓標型式と石材の分類

次に木津郷及び周辺で使用される墓標について述べる。木津郷の墓標を型式学的に分類するにあたり、先行研究である坪井良平の徹底した分類は注目に価する（坪井一九三九）。ここでは、坪井の分類を参考にしながら、大きな形態上の特徴に注目し、A～Kの一一種類に大別し、それを細分して分類した（表2）。A型は外形が舟形光背状を呈し、裏面は荒削りのまま調整[3]されていないものである。B型は方柱形で頭部が孤状を呈し、C型に比べ奥行きに欠け側面が調整されている。先行するA型（仏像が彫刻されているA4型を除く）が近畿特有の墓標型式であったのに対し、このB型は初めて全国的な斉一性をもつとされている（谷川一九八八）。C型は角柱形のもので、D型は笠を有するものである。E型は頭部が三角形に尖っており、その他の点ではB型に似ているもの

大別分類	型式分類記号	特徴
A型 外形が 舟形光背状	A1	五輪塔が線刻されているもの
	A2	額縁を有するもの
	A3	額縁のないもの
	A4	仏像が浮彫されているもの
B型 方柱形で 頭部が弧状	B1	五輪塔が線刻されているもの
	B2	額縁を有するもの
	B3	額縁のないもの
C型 外形が角柱形	C1	頭部が四角錐状のもの
	C2	頭部が円形台状もの
	C3	その他
D型	D	笠を有するもの
E型 外形が駒状	E1	額縁を有するもの
	E2	額縁のないもの
F型	F	自然石を使用し不定形のもの
G型 五輪塔	G1	別材より成るもの
	G2	一材よりなる小型棒状のもの
H型	H	宝筐印塔
I型	I	板碑形のもの
J型	J	その他

表2　墓標の形態分類と特徴

である。F型は自然石を使用したもの。G型はいわゆる「五輪塔」である。H型はいわゆる「宝筐印塔」である。I型はいわゆる「板碑」形をしたもので、二条線に相当するものがある点でE型と異なる。J型はいわゆる「無縫塔」である。K型は上記に分類できないものを総括し、便宜上K型として一括したものである。このうち、A型は「五輪塔」の彫刻があるもの、線刻による額縁があるもの、額縁のないもの、仏像が彫刻されているものの四つに細分され、それぞれA1型、A2型、A3型、A4型として分類した。他のB～J型も表2のように細分できるが、A型の細分型式のようにそれぞれの細分型式が個別の変遷をとげることはないので一括して取り扱う。

石材の分類は、花崗岩、安山岩、砂岩の三種を中心に行った。但し、墓標が現在も祭祀・供養の対象となっているため、岩質同定のための岩石剝片を作成するなど、岩石学的な分類は不可能であり、現場において肉眼による同定を行ったため産地の正確な比定には限界がある。特に花崗岩は肉眼での産地比定が困難であるが、木津・加茂一帯は「領家帯」と呼ばれる花崗岩地帯に属しており、木津から約4㎞上流の加茂町には花崗岩の石切場があるため花崗岩の多くが地元産の石材であることが想定できる。砂岩は「和泉石」と呼ばれる和泉層群に属す青灰色の砂岩で、近世には墓標用石材として広く流通しており、木津においても木津川水運により大量に搬入されていたことは既に拙稿で指摘した通りである（朽木一九九四）。カナンボ石と俗称される安山岩は、地元の奈良産のものであることが坪井により指摘されている（坪井一九三九）。

3　木津郷内の墓標にみられる地域的な差異

本稿では木津郷枝郷三カ村のうち鹿背山、梅谷の二村の墓地及び木津郷外の状況と比較するために鹿背山、梅谷の二村に隣接する加茂郷観音寺村地蔵院裏の共同墓地を調査し、墓標型式・石材という二つの観点から木津郷本郷五カ村共同墓地である山城木津惣墓のデータと比較し、木津郷内の墓標にみられる地域的な差異について考察する。これら二つの属性は、先行する坪井の研究において既に言及されており、類型化が容易なため統計処理による全体像の把握が可能であることから取り上げることとした。

(1)　墓標型式にみられる差異

まず、木津郷における型式変遷の動態をみるため、セ

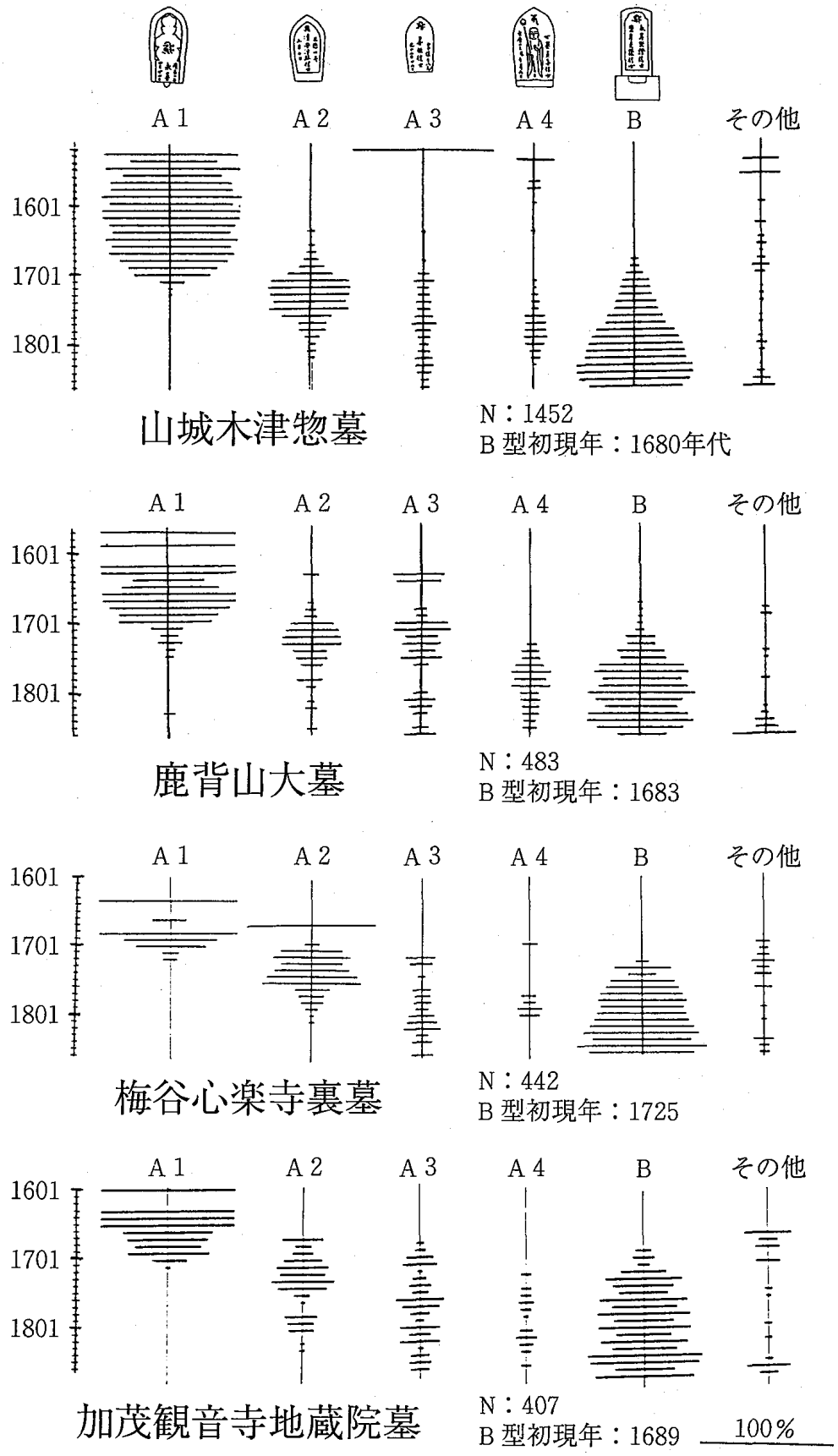

図２　調査した墓地の位置

リエーショングラフを作成して分析する（図2）。このセリエーショングラフは、対象となる墓地において単位期間（一〇年）のうちで立てられた墓標型式毎の墓標数をその期間に立てられた墓標全体の数で割って百分率で表示した棒グラフを年代順[4]に並べたものである。これによって、墓標型式ごとの変遷を視覚的に捉えることができる。

坪井が調査した山城木津惣墓では、A1型からA2型・A3型そしてB型へと変化する様子が分かる。A1型は一七〇〇年代から急激に減少し、A2型は一六四〇年代に出現しA1型と入れ代わるかたちで、一七〇〇年代にピークを迎える。一六八〇年代に出現したB型はその後A2型と入れ替わる形で盛行する。木津枝郷の鹿背山村でも山城木津惣墓と同様にA1型からA2型・A3型そしてB型への変化がたどれる。A1型は山城木津惣墓に少し遅れて一七一〇年代から急激に減少するが、A2・A3型は山城木津惣墓と同様一六四〇年代に出現しA1型と入れ代わる。B型は一六八〇年代に出現し、その後A2・A3型に入れ替わって盛行する。同じく木津枝郷である梅谷村でもA1型からA2型・A3型そしてB型へと変化する。梅谷村開村後の一六七〇年代以後をみると[5]、A1型は鹿背山大墓と同様一七一〇年代から急激に減少する。A2・A3型は一六九〇年代に出現しA1型と入れ代わる。B型は一七二〇年代になりようやく出現し、その後一七六〇年代になりやっとA2・A3型に入れ替わって盛行しはじめる。また、参考のため取り上げる加茂郷の観音寺村でもA1型からA2型・A3型そしてB型へと変化する。A1型は山城木津惣墓と同様一七一〇年代から急激に減少するが、A2・A3型は山城木津惣墓に遅れて一六七〇年代に出現し、あまり盛行しないうちにB型が出現する。B型は一六八〇年代に出現し、A2・A3型に並行して用いられその後主要な墓標型式となる。

これら四墓地の比較を通して特に注目したいのはB型の墓標である。全国的な斉一性をもつB型墓標は一六七〇～八〇年代を中心とする一七世紀後半に淀川・木津川流域を中心とする畿内各地で初現し、その後は主要な墓標型式として各地で積極的に使用されることで知られている（谷川一九八八a、朽木一九九四他）。木津郷内の山城木津惣墓と鹿背山大墓及び加茂郷観音寺村地蔵院墓地ではともに畿内各地同様一六八〇年代にB型墓標が出現している。また、木津郷のすぐ南にあたる奈良の元興

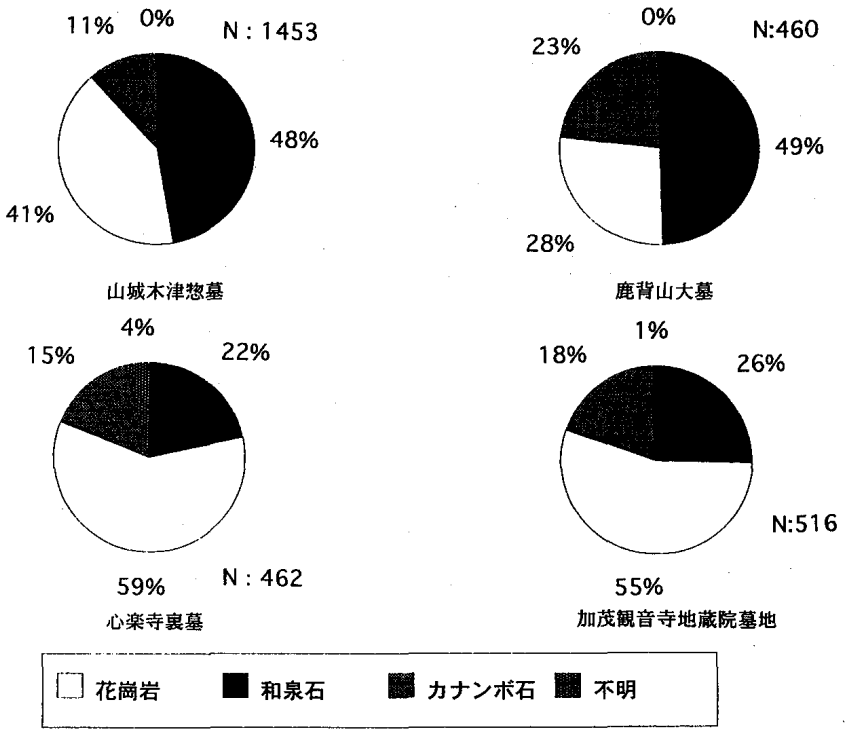

図3　各墓地における石材の使用比率

寺でも一六九〇年代に出現することが報告されている（木下一九六七）。しかし、奈良と木津の中間に位置する梅谷ではA型の墓標が比較的遅くまで存在し、B型墓標の初現時期が一七二〇年代以降となっていてかなり遅れている。つまり、木津本郷や鹿背山、加茂郷観音寺村など近隣の村々と比べて、梅谷の墓標型式の変遷にはB型墓標の初現時期について地域的な差異が認められる。

(2)　石材にみられる差異

次に、石材について検討する。図3は山城木津惣墓、鹿背山、梅谷の各墓地で使用されている石材の比率を示したものである。山城木津惣墓では地元以外からの搬入石材である和泉石（砂岩）の割合が最も大きく約半分の四八％を占める。ついで花崗岩が四一％を占め、奈良産のカナンボ石（安山岩）が一一％を占める。鹿背山大墓でも和泉石が四九％と約半分を占め、残りを花崗岩とカナンボ石が等分する。一方、梅谷では花崗岩が主要な石材となり（五七％）、次いで和泉石（二二％）の順になっている。前二墓地では和泉石が主要な石材であることを考えると、梅谷地区には他の木津郷内各村と比べて差異が認められる。こうした差異が梅谷地区のみに限られるのか確かめるため、参考として加茂地区観音寺村地

梅谷心樂寺裏墓と木津惣墓　　χ二乗値　85.1984

	花崗岩	カナンボ石	和泉石	不明
梅谷	274	68	100	23
木津	595	167	685	3

梅谷心樂寺裏墓と鹿背山大墓　　χ二乗値　111.4375

	花崗岩	カナンボ石	和泉石	不明
梅谷	274	68	100	23
鹿背山	127	105	228	0

梅谷心樂寺裏墓と加茂観音寺地蔵院墓　　χ二乗値　4.2118

	花崗岩	カナンボ石	和泉石	不明
梅谷	274	68	100	23
加茂	284	95	133	4

表3　各墓地における石材の使用数とχ二乗検定

蔵院墓地における石材の比率をみた。加茂地区観音寺村は鹿背山村と山を隔てて反対側にあり、地理的距離からいうと鹿背山村と似た比率になるはずであるが、実際には花崗岩（五五％）の次ぎに和泉石（二六％）の順となり、しかもその割合が梅谷地区ときわめて類似した。

さらに、この梅谷地区と加茂観音寺地区との類似を統計学的に検証するため、2×3の分割表を用いたχ2乗による属性変数間の無相関の検定を行った。但し、表3に示された観察データのうち不明の部分は除外して、[6] 3種の石材比率について梅谷地区と他地区の墓地の間の無相関の検定を行った。その結果、梅谷―加茂の組み合わせのχ2乗値が1.49432、梅谷と木津本郷の組み合わせのχ2乗値が85.19841、梅谷と鹿背山の組み合わせのχ2乗値が111.43747となった。有意水準5％（自由度2、χ2乗分布のパーセント点5.99147）とすると、梅谷―木津本郷と梅谷―鹿背山の組み合わせでは属性変数間（梅谷―木津本郷と梅谷―鹿背山）は相関するという帰無仮説は棄却される。したがって、統計学的にも梅谷地区と加茂地区の墓標には相関関係が指摘できた。

つぎに、梅谷地区の石材にみられる差異は時間的にどのような変遷が追えるのかについて考察する。図4は各

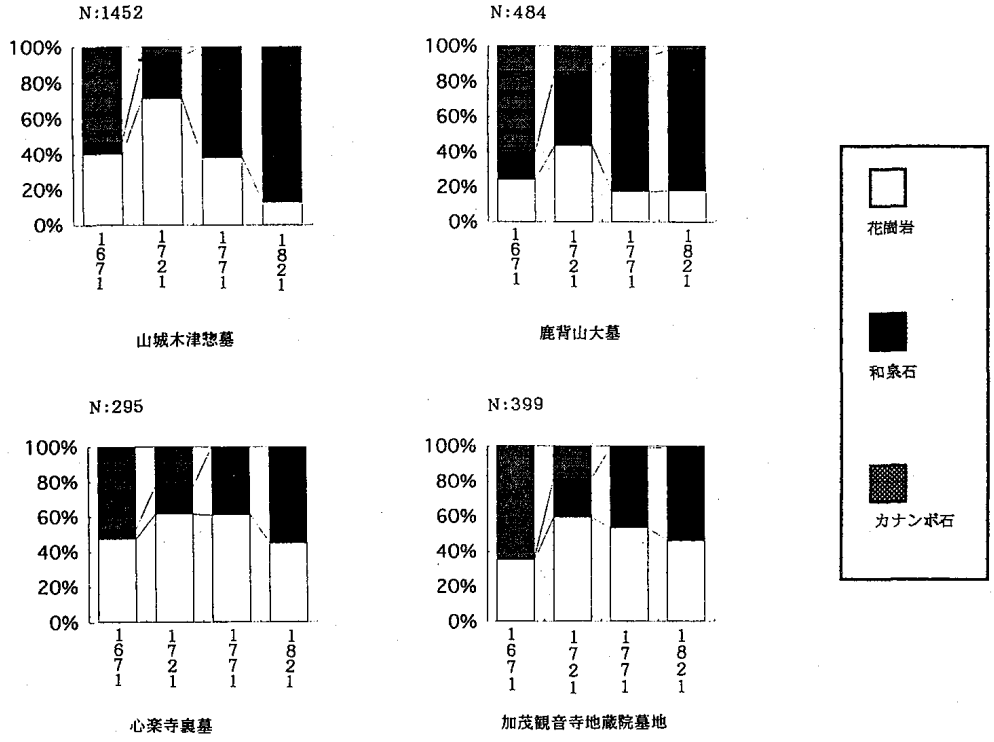

図4　各墓地における石材の年代別使用比率

墓地において使用されている石材の比率の変遷を梅谷の開発が始まった一六七〇年代から五〇年毎に区切って表わしたものである。山城木津惣墓と鹿背山大墓ではカナンボ石（安山岩）から花崗岩に、そして和泉石（砂岩）へと変遷していく様子が分かる。それに対して、梅谷地区は花崗岩の比率はあまり変わらず、カナンボ石（安山岩）と和泉石（砂岩）の間でのみ交代が起こっている。したがって、梅谷地区においては花崗岩が常に主要な石材として使用され、木津川を通じて大量に搬入された和泉石の影響をあまり受けなかったことが分かる。さらに、加茂地区観音寺村のデータを参照すると、梅谷地区と同様に花崗岩の比率はあまり変わらず、カナンボ石（安山岩）と和泉石（砂岩）の間でのみ交代が起こっていることが分かる。この事実は、既に指摘した梅谷地区と加茂地区の間の相関関係とも符合する。

以上の分析から、(1)木津本郷や鹿背山、加茂郷観音寺村など近隣の村々と比べて、梅谷の墓標型式の変遷にはB型墓標の初現時期が遅れるという地域的な差異が認められること、(2)墓標に使用された石材の種類毎の比率については、梅谷地区の石材比率が木津郷内の他地区での比率と異なり、近隣の加茂地区の石材比率と類似するこ

と、(3)梅谷地区と加茂地区観音寺村では花崗岩が常に主要な石材として使用され、木津川を通じて大量に搬入された和泉石の影響をあまり受けなかったのに対し、木津郷内の他地区ではカナンボ石（安山岩）から花崗岩、和泉石（砂岩）へと墓標に使用される石材が変遷している。石材の比率において認められた傾向が使用される石材の変遷という形で時間的にもおえることを指摘した。つまり墓標の考古学的研究によって、梅谷地区の墓標には木津郷内の他地区と比べて地域的な差異が認められた。墓標において認められるこうした差異はその範囲が地域的であることと、墓標は主に当該地区の施主により建てられていることを考えあわせると、全国的な動態の中でとらえるよりも当該地区の施主がおかれた当時の状況・脈絡の中でとらえて解釈すべきである。次章では墓標以外の傍証資料を用いて、このような地域的な差異が生じたことの歴史的背景について考察する。

4　梅谷地区の歴史的背景

(1)　梅谷地区の道にみられる加茂地区との関係

前章(2)節の石材の分析では梅谷地区と加茂地区の類似から加茂地区との相関関係を考えたが、墓標以外の側面でも加茂地区との関係が認められることを道を用いて検証する。道は人や物だけでなく情報も行き交う通り道であるが、道にもその重要度により自ずと格差が生じる。この格差に注目することで、道によって結ばれる二地点間の関係とその強さが分かるはずである。

まず、梅谷における道の重要度を知るため明治一七（一八八四）年に作成された地誌である『相楽郡村誌』（『木津町史』史料編Ⅲ所収）をみると、梅谷村の道路として

奈良道　本村北方、高田村界ヨリ、南方、大和国添上郡川上村国界標ニ至ル、長十五丁、巾二間、村ノ北方、字池ノ谷ヨリ北ニ折レ、鹿背山村ニ通スル支道アリ

とのみある。つまり、梅谷地区を通る3つの道路のうち加茂へ通じる加茂街道のみが見出しに挙げられ鹿背山へ通じる村道（図5中の道A）は補足的に触れられており、市坂を通り井関川沿いに木津へ直接通じる道（図5中の道B）は記載すらされておらず、同じ村道でも記載に差異がある。この記載されていない道（図5中の道B）は市坂の側では「大和街道」の割注で「字奈良道ヨリ東折シ、梅谷村ニ通スル両支道アリ」と記載されており、市

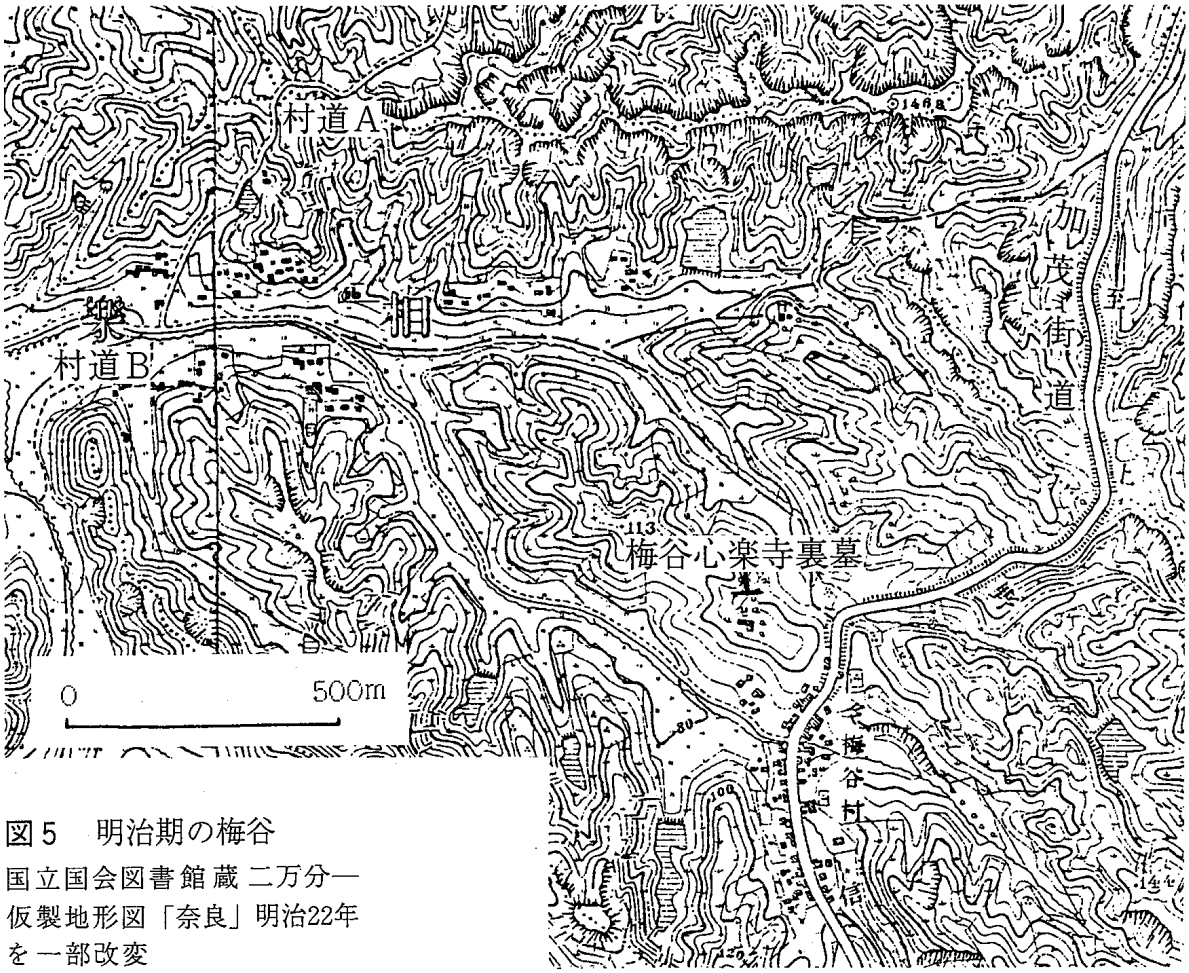

図5　明治期の梅谷
国立国会図書館蔵 二万分一仮製地形図「奈良」明治22年を一部改変

坂側と梅谷側では同じ道路に対して扱いが異なる。また、同じく枝郷の鹿背山村では

木津道　本村東方、観音寺村界ヨリ、西方、木津村界ニ至ル、長十二町廿一間、巾八尺

村道　村ノ西方、木津村界ヨリ、東方、法華寺野村界ニ至ル、長十二町九間、巾六尺、村ノ中央、字二反田ヨリ西折シ、木津村ニ通ス、又村ノ南方、字青渕ヨリ南折シ、梅谷村へ通スル両支道アリ

とあり木津への道が筆頭で掲げられており、その他の村へ通じる道は村道として同列に扱われている。梅谷地区の記載では村道の記載にも差異があるのに対して鹿背山地区では同列に扱われていることから、明治期の段階で梅谷村は木津地区に通じる道よりも加茂地区に通じる道を重要視していることが分かる。文献史料に表われた道の扱いの格差に注目してみると、木津地区より加茂地区に対して強い関係をもっていたことが明らかである。

梅谷村の住民が木津へ通じる道より加茂へ通じる道の方を重要視していたことは、梅谷における家屋敷の空間配置によっても明らかとなる。図5は明治二〇年に測量し、明治二二年に発行された大日本帝国陸地測量部製作の二万分之一仮製地形図大阪十號「奈良」[7]から梅谷村周辺を抜粋したものである。これには加茂街道が他の道路（図中の村道A・B）よりも太く記載されている。さらに、梅谷村では加茂街道[8]沿いに集落が発達しており、木津や鹿背山へ向かう村道（『相楽郡村誌』に記載された村道に対応）沿いにはあまり家屋敷が存在しないことが分かる。また、梅谷の心樂寺住職からの聞き取り調査[9]でも、上梅谷の加茂街道沿いの家は古くからの家が多く、木津へ向かう道沿いの家は「シンヤ」と呼ばれる分家の家が多いとのことである。

(2)　梅谷地区の新田開発と木津郷内の他村との関係

そもそも梅谷村における加茂街道重視の傾向は、加茂街道の護持が梅谷村開村時の趣意の一つであったことに起因する。梅谷村開発願人中岡又右衛門の記した『梅谷新田開発記』（『木津町史』史料編Ⅱ所収）には

南都より伊賀伊勢江之往還筋ニ而高田村迄凡壱里余も人家絶たる山道、折節者山賊追剝等に出逢生害におよひ、往来之難儀数度見及承り及候事、尤新田開発仕一在所取立候ハヽ一村之人家渡世之助け、又者往来之便ニ茂可成事共与存

と加茂街道の護持のために梅谷村が果たす役割を述べている。こうした事情を踏まえたため木津郷内の他の村々の街道護持の分担が全て奈良街道であるのに対して、梅谷村の分担は加茂街道となっている（表1）。

加茂街道に注目することで梅谷村と加茂地区との緊密な関係が明らかとなったが、次に木津との関係が加茂と比べて疎遠になった原因について同じく梅谷地区の新田開発に注目して考えてみる。1章で略述したように、乱開発による土砂流失を防ぐため承応元（一六五二）年から享保八（一七二三）年まで梅谷地区周辺は郷民立ち入り禁止の御留山となっていた。そのことは、貞享二（一六八五）年の『惣山御訴訟書写』（『木津町史』史料編Ⅱ所収）に

木津郷惣山之儀先年ハ村〻立会刈申候ニ付山砂大分はせ出、山川堤度〻破損仕田畑荒申水押ニ相成申候故、惣郷相談之上三拾三年以前五味備前守様水野石見守様江言上仕、御留山ニ被為　仰付、其旨相守り郷中ゟ山廻りヲ付政道仕候故、山はへ砂も少〻留り申候御事

と書かれていることからも分かる。しかし、『梅谷新田開発記』（『木津町史』史料編Ⅱ所収）中の延宝三年一〇月二一日の訴状写に

旅人折〻者松明之火を落し枯草之時分ニ者毎度山焼申候ニ付、木津郷ニ付申候井関河与申御座候、右申上候通焼申ニ付土砂流出申候

とあるように、御留山であっても井関川の土砂流出が問題となっていた。したがって、井関川の上流である梅谷地区を開発する際には土砂流出が木津郷民の最大の争点となった。京都代官や京都町奉行のみならず、江戸表への三度の訴願を含む都合三〇〇回にも及ぶ訴訟の末、延宝七（一六七九）年にようやく梅谷地区の開発許可が下りたのである。この争論の様子は、後に梅谷開発の発起人である中岡又右衛門が『梅谷新田開発記』（『木津町史』史料編Ⅱ所収）の中で

寔ニ五ヶ年之間所〻方〻江新田御訴訟之事而已ニかゝりゐ罷有候、諸事之入用又者関東江三度之往返御江戸ニ数月逗留之用脚等、かれ是以て容易之事ニハあらす、已ニ　此新田　御赦免無之時者身上破滅し嘲を残し、此身をもいかゝ可成与存程之難儀ニ及候、然而是身一人之為はかりに不有儀顕然なるを、或ハ人〻ニ被妨断腸するをも能堪忍し、数多之人之機嫌をはかり手をつかねて得心を頼ミ、様〻と気根をつくし身を労せし其艱難筆にも難尽

と述べており、梅谷地区の開発に先立つ激しい争論が展開されていたことが分かる。その後、貞享二（一六八五）年の『惣山御訴訟書写』（『木津町史』史料編Ⅱ所収）に

九年以前（延宝五、一六七七）巳年木津郷百姓之内、御留山之内梅谷新田開発仕度由郷中江数度断申候得共、開発仕候而者山川江砂押出し本田在所之構ニ成可申与存同心不仕候処、開発望之者共ゟ山〻木草を植能はやし砂留能仕可申旨達而申候ニ付、村中同心之之（ママ）上慥成一札を取置申候、自夫　御公儀様江開発望之者共御訴訟仕、開発被為仰付候御事

とあるように、植林と砂防工事を条件に木津郷庄屋年寄一同は梅谷の開発を許可している。このように、新田開発に伴う梅谷地区と他の木津郷各村との争論が契機となり木津との関係が加茂と比べて疎遠になったことが考えられる。

(3)　梅谷地区の歴史的背景から見た墓標の地域的差異

こうした梅谷地区と近隣の村々との関係は、墓標において認められる地域的差異に対して如何なる影響を及ぼ

していたのであろうか。以下、石材と石工、墓標型式の普及と梅谷開発者の二つの視点から考察する。

3章において墓標型式と石材の二属性で梅谷地区が木津郷の他地区と比べて地域的な差異がみられたことを指摘した。墓標型式と石材の二つの属性は共に墓標の製作つまり石工や石材の流通経路と密接に関わるものである。この二つの属性について梅谷地区では他地区と比べて地域的な差異が認められるということは、墓標の入手先つまり墓標を製作した石工が異なることを示唆する。さらに3章(2)節の石材についての分析で指摘されたように加茂地区との類似が認められることから、近世期の梅谷地区の人々は木津郷の石工よりも関係が深かった加茂地区の石工に墓標の製作を依頼していたと考えられる。また、安政期には加茂郷内の法華寺野村の向山で「諸石切り出し船積み」がされていたことが文献資料から分かる（加茂町史編さん委員会一九九一）。この史料からは石材の種類は判別できないが当該地区の表層地質から判断して花崗岩であると考えられ、加茂郷大野村には大坂城築城の際に廃棄された花崗岩製石材いわゆる「残念石」が現存することも勘案すると、加茂地区には花崗岩を取り扱う石工が存在したことが分かる。このことは、加茂地区と梅谷地区における主要な墓標の石材が共に花崗岩であることと合わせて、加茂地区と梅谷地区の墓標が共に加茂地区の石工により製作されたと推断できる証左である。現在の梅谷地区でも加茂地区の石工に墓標の製作を依頼することがあるのも注目すべきである。

梅谷地区と近隣の諸村との関係が墓標に影響したと解釈できることは、梅谷地区と木津郷内の他村との関係においても指摘できる。先述したように、梅谷開発の時期と普及時期が重なるB型墓標は、近隣の村々と比べた場合に梅谷村においてのみ出現する時期が四〇年ほど遅れており、一七二〇年代になって初めてB型墓標が出現している。この一七二〇年代は開発の当事者である中岡又衛門が死亡した宝永八（一七一一）年[10]から一〇年以上たった頃にあたる。B型墓標が木津川水運を通じて和泉石と共に木津・加茂などの浜を経由して普及していった[11]ことを考え合わせると、梅谷におけるB型墓標の普及時期の遅れは、開発の当事者が存命中である開発当初の段階で木津本郷と梅谷村との間の円滑な交流が妨げられていたことが墓標の造立に影響していたためであると考えられる。ちなみに、梅谷において最初にB型墓標を用いたのは開発者である中岡家とは別の家で、かつその後二

○年間にB型墓標を建てた家も梅谷の四○軒余りの中で5軒と限られていることもこうした影響を示唆する。

以上のように、墓標に認められる地域的な差異の背景として、梅谷地区の人々が行政的な帰属関係に反して木津よりも加茂の石工を選ぶという行動をとったことが指摘でき、そこには梅谷地区の人々は石工を選択していたという当時の人々の「意志」が認められる。つまり、墓標が造立された当時の当該地域の村レベルの社会的関係をふまえることにより、墓標に認められる地域的差異は、当時の人々の「意志」に即した形でより主体的に解釈することが出来る。勿論、墓標を造立した施主個々人の日記や随筆の類が存在しないため、墓標の造立行為の基盤をなす施主が石工を選ぶという行為にこうした村相互の社会的関係が何処まで影響したかを直接的に考察することには限界がある。さらに、製作した石工の名前が墓標自体に記されることは稀であり、造墓に際して石工が選択される実態や、その背後にある施主の「意志」を墓標から直接読み取ることも不可能である。しかし、このような施主の「意志」にかかわる領域が、墓標自体の物質的特徴や文献史料から直接読み取ることが出来ない領域であっても、そうした領域が地域的な差異となって現実の墓標に認められる諸特徴に表れている以上、施主の精神的側面は墓標研究において看過し得ない重要な研究課題である。施主をとりまく当時の地域的・社会的関係を綿密に復元していくことにより、墓標や文献史料から直接読み取ることが出来ない領域であっても歴史的に解釈し記述していくことが可能になるはずである。

まとめ

本稿ではまず山城国木津郷梅谷村及び近隣の村々の近世墓標を比較し、墓標において認められる地域的な差異について、(1)木津本郷や鹿背山、加茂郷観音寺村など近隣の村々と比べて、梅谷の墓標型式の変遷にはB型墓標の初現時期が遅れること、(2)墓標に使用された石材の種類毎の比率については、梅谷地区の石材比率が木津郷内の他地区での比率と異なり、近隣の加茂地区の石材比率と類似すること、(3)梅谷地区と加茂地区観音寺村では花崗岩が常に主要な石材として使用され、木津川を通じて大量に搬入された和泉石の影響をあまり受けなかったのに対し、木津郷内の他地区ではカナンボ石（安山岩）から花崗岩、和泉石（砂岩）へと墓標に使用される石材が変遷しており、石材の比率において認められた傾向が使

用される石材の変遷という形で時間的にもおえることの三つを指摘した。次に、墓標のみならず地域の史料も併用して、梅谷村の墓標に見られる地域的差異の背景として当時の村レベルの社会的関係を復元した。つまり、梅谷地区と近隣の村々との関係の深浅が墓標の製作を依頼した石工の違いとなって表われ、それが墓標において認められる地域的差異となって顕現したと解釈した。

冒頭において述べたように、墓標研究の流れの中で単なる形態論的分析を越えて「墓標という資料の裏側にある〝意味〟」（三好一九九〇）とりわけ施主の「意志」を明らかにしようとする試みが現在の主要な研究関心となりつつある。そうした課題を論じる際には施主の造墓という行為に対して、様々な形で影響を及ぼす地域の歴史的社会的背景を無視することは出来ない。即ち、「墓標という資料の裏側にある〝意味〟」や施主の「意志」を全国的な歴史の動態の中に画一的に位置づけ、観念的に論じるのではなく、出来うる限り多様な史料を駆使して、より綿密な地域毎の歴史的背景を復元・記述する中で施主個人の「意志」を解釈し、具体的に論じることが重要である。さらに、「墓標という資料の裏側にある〝意味〟」を全国レベルでの研究対象とするためには、個々の地域での具体的な事例研究を通じて蓄積された多くの成果を総合し普遍化していくことが必要となる。そういう意味で、墓標以外の多様な史料を綿密に使用し、多角的視野の下での墓標研究の進展が望まれる。

謝辞

本稿は一九九四年度慶應義塾に提出した修士論文をもとに加筆修正したものである。本稿作成にあたって、日頃より御指導いただいている鈴木公雄先生をはじめとする民族学考古学専攻の諸先生には全般にわたる御教示を賜った。また、墓標調査を行った心楽寺（梅谷）、西念寺（鹿背山）、地蔵院（観音寺）の各寺院の方々には調査を快諾していただき、加茂町教育委員会の芝野康之氏、九尾佳二氏及び木津町教育委員会の方々には数多くの御教示を賜った。末筆ながら深く御礼申し上げます。

（1）鹿背山は大墓は拙稿（朽木一九九四）のデータを、梅谷心樂寺裏墓地のデータは今回新たに調査したものを使用した。

（2）地蔵院裏の墓地は両墓制の「詣り墓」である。基本的に墓標を伴わない「埋め墓」は別に存在する

（3）墓標の側面などを研磨して平面にすることをいう。

(4) 例えば一六〇〇年代は一六〇一～一六一〇年とする。つまり一の位が0の年は前の年代とする。

(5) 梅谷開発以前の梅谷地区は山林であり、梅谷開発以前の記年銘をもつ墓標は開発以後に梅谷に持ち込まれたと考えられるため、ここでは梅谷開発以後を中心に取り扱う。

(6) 不明の値に引きずられて過った結果をもたらすことと、不明の項は肉眼による鑑定のため生じたものであり本来は先の三種の石材に吸収されるはずであることからこのように扱った。

(7) 国立国会図書館所蔵資料を利用した。

(8) 原図中では信楽道と記載されている。

(9) 梅谷村内唯一の寺院である心樂寺の中道英文氏に一九九四年一一月八日聞き取り調査を行った。心樂寺は世襲制をとっておらず、代替わりの度に村外から新しい住職を迎えるが、一九四九（昭和二四）年生まれの中道氏は木津地区の出身で、一九七九（昭和五四）年五月から心樂寺の住職を勤めている。

(10) 『梅谷新田開発記』（『木津町史』史料編Ⅱ所収）の記載による。

(11) 前掲の拙稿（朽木一九九四）を参照。

参考文献

乾　幸次　一九八七『南山城の歴史的景観』古今書院

加茂町史編さん委員会一九九一『加茂町史』第二巻近世編　加茂町

木津町編さん委員会一九八四『木津町史』史料編Ⅱ　木津町

木津町編さん委員会一九八七『木津町史』史料編Ⅲ　木津町

木津町編さん委員会一九九一『木津町史』本文編　木津町

木下密運　一九六七「元興寺極楽坊板碑群の調査研究」『元興寺仏教民俗資料研究所年報』元興寺仏教民俗資料研究所　所収

朽木　量　一九九四「近世墓標の形態変化と石材流通―淀川・木津川流域を中心に―」『民族考古』二

坂詰秀一　一九八八「中・近世墓標研究の回顧と展望」『考古学ジャーナル』二八八

谷川章雄　一九八四「近世墓塔の分類と編年」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊』一〇哲学史学編

谷川章雄　一九八八「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』二八八

谷川章雄　一九八九「近世墓標の変遷と家意識」『史観』一二一

坪井良平　一九三一「背光型五輪塔―墓標雑考一―」『考古学』二―一

坪井良平　一九三九「山城木津惣墓墓標の研究」『考古学』一〇―三

三好義三　一九八六「近世墓標の形態と民衆の精神の変化について」『立正大学大学院年報』三

三好義三　一九九〇「近世墓標」『歴史考古学の問題点』近藤出版社　所収

Barber, Russel J.1994 *Doing Historical Archaeology: Exercises Using Documentary, Oral, and Material Evidence.* Prentice

Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.

Clark, Lynn. 1987 Gravestones: Reflectors of ethnicity or class?, in: SuzanneM. Spencer-Wood (ed.) *Consumer Choice in His torical Archaeology.* Plenum Press, New York. pp. 383-395.

Deetz, James, and Edwin S. Dethlefsen. 1965 The Doppler effect and archaeology: A consideration of the spatial effect of seriation. *Southwestern Journal of Anthropology* 21:196-206.

Deetz, James, and Edwin S. Dethlefsen. 1967 Death's heads, cherub, urn and willow. *Natural History Magazine* (March), 30-37.

Dethlefsen, Edwin S., and James Deetz. 1966 Death's heads, cherub, and willow trees: Experimental archaeology in colonial cemeteries. *American Antiquity* 31 (4):502-510.

Dethlefsen, Edwin S., and James Deetz. 1967 Eighteenth-century cemeteries: A demographic view. *Historical Archaeology* 1:40-42.

Dethlefsen, Edwin S. 1981 The cemetery and culture change: Archaeological focus and ethnographic perspective, in: Richard A. Gould and Michael B. Schiffer (ed.) Modern Material Culture: The archaeology of us. Academic Press, New York. pp.137-159.

Hodder, Ian. 1991 *Reading the Past: Current approaches to interpretation in archaeology.* 2nd ed. Cambridge University Press, Cambridge.